

# 丸山眞男文庫資料の整理・公開 ―二〇〇七年一〇月以降の進展と展望

松沢 弘陽・山辺 春彦

丸山眞男文庫資料の整理・公開については、二〇〇七年九月までの作業の概要が『東京女子大学比較文化研究所附置丸山眞男記念比較思想研究センター報告』創刊号・第二号・第三号に掲載されています。

今号では、その後をうけて、二〇〇九年三月までに行われた作業の要点と展望を記します。

## I ノート・草稿類の整理

OPACによる資料検索を行うため、データベースを作成する作業を引き続き行いました。整理が開始された当初は、OPACの運用が想定されていなかったため、資料に関する情報は紙媒体で整理されました。これをデータベースに登録するには、OPAC用のデータに加工する必要がありますが、資料の総数が約六〇〇〇件と膨大で、これまでの整理にも一部不備や混乱があるため、時間がかかっていました。たとえば、これまでは一つの資料を複数の分類項目に登録してきましたが、より適切と思われるものを選び、他の登録を抹消しています。タイトルが長すぎるものは、検索システムの想定範囲内に収まるように短縮します。その他にも、同じ資料番号に複数の資料が登録さ

れていたりと、資料番号の枝分けの仕方が不適切な場合などがあり、その都度修正を行っています。資料のタイトルのよみがなの間違いは、丸善株式会社やアルバイトの方の応援も得ながら訂正しています。

ノート・草稿類の中に図書や雑誌があった場合は、これまでと同様に、図書は東京女子大学図書館の蔵書として登録し、雑誌は『丸山文庫寄贈図書資料目録』（冊子体）の雑誌の部に記入しています。

京セラ丸善システムインテグレーション株式会社が発注した検索システムは、利用者の便宜をはかるとともに、なるべくこれまでのデータを生かして作業負担を軽減するという観点から修正を加えました。二〇〇七年度末よりホスティングサーバでの仮運用を開始しています。データベースへの登録が完了した資料については、公開に向けて、プライベート情報が記載されているために公開できないものと、原物が劣化しているために電子媒体で公開するものを選び出す作業を行っています。電子媒体で公開する資料は、丸山文庫内でスキヤンを行ってPDFファイルを作成しています。また、資料の管理や供用に正確を期するため、すべての資料を一件ずつ封筒に入れ、原物を公開するもの、PDFファイルで公開するもの、非公開のものを区別する

ために、封筒にそれぞれの印を押しています。

## II 図書の整理

富士ゼロックスシステムサービス株式会社に依頼した旧蔵書の丸山による書き込み類の電子情報化は、二〇〇七年中に終了しました。約二・三〇〇冊の図書が対象となり、六万五〇〇〇枚近くのスキヤンが行われました。しかし、作成されたPDFファイルには多くの欠漏があったため、原本と照合しながら、追加すべきページと不要なページをリストアップしています。一冊一冊PDFファイルとつきあわせながら、見逃されている丸山の書き込み類がないか、また書き込み類がないページや他者の書き込みがスキヤンされていないか、すべてのページをめぐって調べなければならぬので、この作業も時間がかかっています。

書き込みや折り込みなどのある図書は、基本的にPDFファイルで閲覧していただくという方針ですが、特に書き込みの多い二〇冊については、閲覧用の複製本を作成することになっています。

また、傷みのある図書約三〇〇冊を、東京女子大学図書館のスタッフに補修していただくことになりました。

## III 今後の作業

ノート・草稿類については、データベースへの登録作業を完成させます。まったく未整理の資料として、岩波書店の故吉野源三郎氏が整

理・保存していた平和問題談話会関係の一次資料があります。これについても、調査票と分類表を作成し、データベースに登録します。

登録作業が済んだ資料は、封筒に入れ、PDFファイルでの閲覧となるものはスキヤンします。ただし、講義ノートや講義プリントなど、大型のものや冊子体の資料のスキヤンは、丸山文庫のスキヤンでは行うことができないため、富士ゼロックスシステムサービス株式会社に依頼する予定です。

図書については、PDFファイルと原本との照合作業が終わった後に、不要なページを削除するとともに、追加のスキヤンを富士ゼロックスシステムサービス株式会社に発注し、新たにスキヤンされたページを元のPDFファイルに差し込むこととなります。

以上の作業が完了すれば公開となりますが、ノート・草稿類のうち整理が済んだ部分と、二〇冊の複製本を先行して公開することになっています。なお、丸山文庫の資料の性格上、東京女子大学図書館の既存の閲覧手続をそのまま用いることはできません。そのため、丸山文庫独自の閲覧規則・手続の作成にとりかかっています。

これまで電子情報化作業の対象となっていないなかった六〇〇冊近い楽譜については、書き込み類の電子情報化を行うか、行うとすればどの範囲かといったことについて、今後検討する予定です。

また、OPACに登録されていない雑誌と一部の抜刷は、登録作業を行った上で書き込み等を調査し、各資料の重要度を決定した上で、必要があれば電子情報化を行います。